かっぱの婿(むこ)さん　鹿児島県

むかし、あるおじいさんに、娘(むすめ)が三人ありました。

ある日のこと、おじいさんは、広い田んぼに水を入れていました。疲(つか)れたので、ふと、ひとりごとをいいました。

「わしの田んぼに水を入れてくれる人がいたら、娘三人のうちのひとりを嫁(よめ)にやるんだがなあ」

すると、そこへ、かっぱが出てきて、

「じいさん、じいさん。今、なんといった」とききました。おじいさんが、

「わしの田んぼに水を入れてくれる人がいたら、娘三人のうちのひとりを嫁にやるといったんだ」

というと、かっぱは、

「それなら、おれが水を入れてやるから、娘をもらおう。うそをついたら、おまえのしりを食うぞ」といって、たちまち、田んぼに水を入れました。

おじいさんは、心配しながらうちに帰りました。

うちに着くと、おじいさんは、上の娘に、

「田んぼに水を入れてくれる人がいたら、娘を嫁にやるとひとりごとをいったら、かっぱが出てきて水を入れてくれたんだ。おまえ、かっぱのところに嫁に行ってくれないか」といいました。娘は、

「人間の嫁にならなるけれど、かっぱの嫁になんかなれません」といいました。

そこで、二番目の娘を呼びました。けれども、二番目の娘も、

「人間の嫁にならなるけれど、かっぱの嫁になんかとんでもない」といいました。

おじいさんは、大きなため息をつきながら、末の娘を呼んでいいました。

「田んぼに水を入れてくれる人がいたら、娘を嫁にやるとひとりごとをいったら、かっぱが出てきて水を入れてくれたんだ。おまえ、かっぱのところに嫁に行ってくれないか」

末の娘は、

「わかりました。わたしがかっぱの嫁になりましょう。嫁入り道具をそろえてください」といいました。

「申し訳ないなあ。嫁入り道具は何がいいんだ」

「ひょうたんを七つ、網(あみ)にくるんで持たせてください」

おじいさんは、ひょうたんを七つ網にくるんで、娘に持たせてやりました。

娘は、ひょうたんをかついで、ひとりで出ていきました。そして、川まで来ると、堤(つつみ)に立っていました。

「さあ、嫁に来たから、早く嫁入り道具を運んでおくれ」

かっぱはよろこんで出てきて、ひょうたんを水の中に入れようとしました。けれども、ひょうたんは、入れれば浮き上がり、入れれば浮き上がりして、どうしても水の中に入りません。娘は、

「おまえは、人間を妻(つま)にするといって、嫁入り道具も運べないの。できないなら、ただではすまないよ」といいました。

かっぱは、またやってみましたが、やっぱり水に入れることができません。とうとう、

「ああ、もう、どうかこの嫁入り道具を持って帰ってくれ。おれにはとても入れることができない」

といいました。娘が、

「それなら、二度と、わたしや姉さんを嫁にほしいといってはいけないよ」というと、かっぱは、

「決していわない」と約束(やくそく)しました。

それから、娘はいいました。

「もうひとつ、約束しておくれ。わたしが生きているあいだ、いつも田んぼに水を入れるんだよ」

「わかった。かならず、水を入れる」

娘は無事(ぶじ)に家に帰りました。それからは、田んぼの水がかわけば、いつも、かっぱが水を入れてくれたので、みんなは死ぬまで幸せに暮(く)らしたということです。

村上郁再話

資料『沖永良部島昔話集』岩倉一郎／民間伝承の会